王朝文学文化研究会　土曜部会
平成二十二年十一月六日　学部二年　川畑有貴

古今和歌集　春歌上　三二・三三番歌

題しらず　　よみ人しらず

三二　折りつれば袖こそにほへ　梅の花ありとやここに鶯の鳴く

【語釈】

●袖こそにほへ

袖が殊に、その移り香でにおうのだ。袖の香は当時の風として薫物の香である。それを鶯との関係から梅の花の香の移り香としたもの。（評釈）

この下に「花が実際にあるわけではない」などと補って解する。（新全集）

●ありとやここに

「ここにありとや」を倒語としたもの。「ここに」は「袖に」。「ありとや」は、梅の花があると思うのか、で、「や」は疑問。（評釈）（全集も同様の説）

【注釈】

●花を「折る」のは唐詩にも好んで読む。花を心から愛するやさしい美的行為のひとつ。梅は香りを主として読むが、色（姿）もよむ。（新大系）

●梅の花が咲くと鶯がその枝に来て鳴く美しい光景を、人間生活に引きつけて、梅の花は女性、鶯は男性で、そこに恋愛関係があると見るのは、当時の詩的常識となっていたものである。今は、梅の花のない所へ鶯が来て、しかも作者の身に近く鳴いたのである。梅の花がないのに鶯が鳴くという異常なことに対して理由を求め、自分は前に梅の花を折ったので、その移り香が袖にあるところから、鶯は梅の花があると思ったのであろうかと解したのである。これは無論、誇張である。（中略）耽美的な心に、理由を求めて分解し、誇張する事は、当時最も好まれたことで、これが新しい歌風の中心だったのである。よみ人しらずであるが、この歌は当時の歌風の中心に迫っている趣のあるものである。（評釈）

※古今集において「梅」と「鶯」のよまれている歌は五番歌などを参照。

※三一番歌の「帰る雁」にも、これから花が咲くというのに帰ってしまうなんて、花の無い里に住み慣れているのだろうか、という理由が推測されている。

※余釈として、「ありとやここに」という句が用いられている歌の例を挙げる。

きく人もありとやここにほととぎす　み山をいでぬこゑのきこゆる（雅康集・一〇四）

をりつればありとやここに菊の花　こてふも袖にしたひきぬらん（雪玉集・一四二七）

呉竹の園生かはらぬ世世のやどもありとやここになる鶯（通勝集・八〇六）

【通釈】

梅を手折ったので、その移り香で私の袖が匂うのだが、それを梅の花があると思ったのだろうか、私の袖に鶯が来て鳴いている。

三三　色よりも香こそあはれとおもほゆれたが袖ふれしやどの梅ぞも

【語釈】

●色よりも

「色」は梅の色で、当時の梅はすべて白梅であった。（評釈）

●あはれ

愛でたい、というに当たる。（評釈）

●たが袖ふれし

香の上で、第一に思われるのは、衣に染みた薫物のそれである。薫物は身分の高い人ほど、好い、また高い香の物を用いていた。「たが袖ふれし」は、梅の香を薫物の移り香として、どういう人の袖が触れてその香をとどめたのかの意。「たが」と言われている人は身分が高いとの余意がある。（評釈）

●やど

「宿」とも、「屋戸」とも表記される。ここでは家の庭前の意。（新全集）

●ぞも

「ぞ(係助詞)」+「も(終助詞・詠嘆)」で、「たが」の様な疑問語とともに、詠嘆を伴う疑問の意をあらわす。(新全集)

【注釈】

●梅の香の愛でたさを、怪しみ驚いた心である。このよみ手はさらに薫物の香を愛でたいものとおもうが、しかしそうした薫物は憧れであって、自身では用いられない階級の人である。これはおのずからなる余情となっているものであるが、この心は多くの共鳴者を持って、味わいのあるものとされたと思われる。(評釈・一部改)

【通釈】

色よりもその香をより愛でたいと思うことだ。いったいこの家の梅は、どのような方の袖がふれて、その移り香をとどめているものかなあ。

【配列】

三一　春霞たつを見すててゆくかりは花なき里に住みやならへる

三二　折りつれば袖こそにほへ　梅の花ありとやここに鶯の鳴く

三三　色よりも香こそあはれとおもほゆれ　たが袖ふれしやどの梅ぞも

三四　やど近く梅の花うゑじ　あぢきなくまつ人の香にあやまたれけり

三二番歌は前の鳥歌群をうけついで「鶯」をよむ。同時に、ここから梅歌群がはじまる。

三三、三四番歌は梅の香に重きを置いた歌となっている。

【参考文献】

古今和歌集評釈新訂版(評釈)　角川書店
新日本古典文学全集(全集)　小学館
新日本古典文学大系(新大系)　岩波書店